Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2005.2
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.30

CONTENTS

・ 明けましておめでとうございます
・ 栗田紘一郎氏ギャラリートークに参加して
・ 眼差しの触覚
・ ゾーンシステム研究会第９回写真展全作品
・ ゾーンシステム研究会第９回写真展スナップ
・ ゾーンシステム・テクニカルアドバイス
　　＜レンズ磨きと再コーティング＞
・ 研究会展での出会い
・ ゾーンシステム研究会定例会日誌
・ インフォメーション

明けましておめでとうございます

中島 秀雄

明けましておめでとうございます。

昨年は、大きな事件や自然災害が多発し騒がしい一年だった。高度に発達したテクノロジーをもってしても、自然災害を予知することすら出来ないことがはっきりした年だったとも言える。写真界ではデジタル化がいっそう早まり、それに伴い使い慣れた印画紙や薬品等が簡単に手に入らなくなってきた。新しい物が古い物を淘汰して行くことは自然なことだが、どうしても変えたくない、変える必要のない事や物があるのも事実だ。フィルムや印画紙、それに伴う薬品は我々の写真制作に欠かせないもので、今後、研究会はネット世界を駆使して安定的に確保できる方法を研究する必要があるだろう。

昨年、ある楽器メーカーが誰もが簡単に吹奏できる電子トランペットを発売した。大変な人気で、需要に生産が追いつかないという。私の経験では、トランペットは最も難しい楽器の一つだと思っている。それ故にトランペット演奏に苦労し、憧れている人達に電子トランペットは受け入れられたのだろう。詳しいことは分からないが、すでに電子的にできた音を外に吹き出すような仕掛けだという。果たして、これは演奏と言えるのだろうか。デジタル写真がこの楽器になんとなく似ていると考えるのは私だけだろうか。

さて、研究会は今年で 11 年目に入り、研究会展覧会としては 10 回目となる。今回、研究会は東京、京都の２会場を予定していて、研究会の活動範囲を地方に広げるきっかけにしたいと考えている。10 回展は、過去の作品から現在までの優れた作品の中から選抜し、会員全員が参加できるように考えたい。半切サイズ 50 点を目標に、余裕のある展示会場を見つけるために現在検討しているところである。

また、今年は、アンセル・アダムスの暗室見学やポイントロボス、カーメルの街の撮影も予定されている。アダムスのすばらしいプリントの多くは、カーメルにある自宅の暗室でプリントされたもので、我々が単に暗室と呼ぶ以上に創作の場にふさわしい多くの工夫や改良が施されているものと想像している。現在、息子のマイケル・アダムスが管理していて、一般には公開していないようだ。今回、マイケルと我々を仲介している写真家の吉田隆志さんは、祖父がヨセミテ公園で木版画のすばらしい作品を作り続け、そのことが縁でアダムスと親しくなり、以来ずっと親交を続けている。マイケル・アダムスも 70 歳を過ぎ、暗室の管理の面で今後どうなるか分からない。改装や整理するといううわさも聞いていて、見学は最初で最後になるかもしれない。

ところで、私も含めて研究会員は果たして銀塩写真の完成域に達しているのだろうか。
あるときはうまく行き、あるときはうまくいかないと言っている様では完成したとは言えないだろう。複雑な光の物理現象や目に見えない化学作用には多くの越えなければならない問題があり、確かにゾーンシステムはそれらの問題を越えるための最も優れた方法論であるに違い。しかし、そこには多くの経験とアートに関する確かな知性を必要とするように感じる。ゾーンのわずかな判断ミスや現像時間、温度、攪拌の違いがフィルムに与える微妙な影響はきっと大きいに違いない。これらのコントロールに一人一人の経験や知性が求められ、それゆえ日々たゆまない研究が必要なのだ。

今年の東京展、京都展には、銀塩写真の創造性に富むすばらしい作品が展示できるように、皆さんとがんばりたいと思います。

栗田紘一郎氏ｷﾞｬﾗﾘｰﾄｰｸに参加して

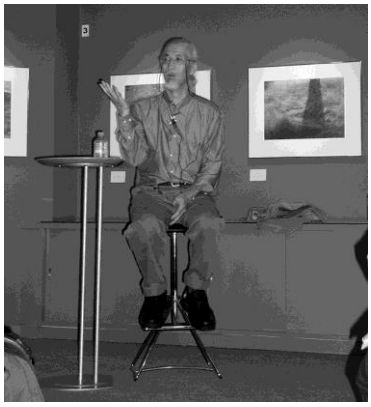
松本ひさ子

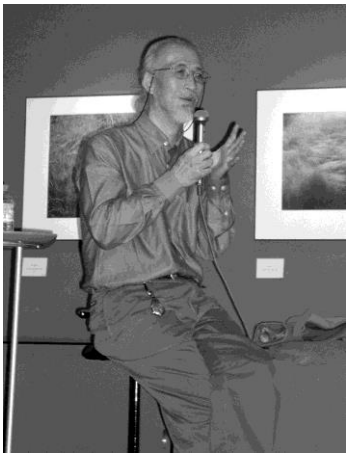
何年か前、銀座で井津建郎さんのプラチナプリントを見たときの「これも写真なのか？」と思った記憶が蘇る。これは版画、エッチングではないかと思った。

その微妙なトーンに思わず触れてみたくなるような感覚は何なんだろう。暖かなデティールに見とれてしまう。

写大ギャラリーの薄暗い会場のスポットライトで栗田紘一郎氏が紹介された。長身痩せ形の紳士で地味な色合いのジャケットにグレーの髪を後ろに束ね、めがねの奥の優しそうな眼差しが静かに語りかける。気負わない風貌に好感が持てた。

広告写真を職業としているうちに消費されるものでなく残ってゆくものをやりたいと思うようになりファインアートの道に入ったと言う。作品の所に移動してその撮影に至るいきさつ等話された。ミネソタの草原にカヌーで入り込み、取り直しのできない写真であっても場所や状況の説明は一切ない。見る側の感性にまかせる。ヘンリー・デービッド・ソローというアメリカ１８６０年代の文学者の考えを受け継いでいる。人間は自然とどうやって協調していくのか、東洋的な思想も相まって自然と人間は分けるものではなく一体感をもって人間も自然の中の一つととらえる。被写体としての自然は地名（場所）を指すのではなく地圏・気圏・水圏このエネルギーの動きという。森の生活、風や流れ、朽ちたものにじっくりと目を向ける。





ニューヨークに永住されてる栗田氏は語った。アメリカの芸術に写真は必ず含まれていてその裾野のひろがりが写真の経済を支えている。ファインアートは作る人・鑑賞する人・買ってくれる人がいないと成り立たない。

プロセスの出来不出来は神さまの思し召しのような部分があり温度湿度によっても微妙に異なるが、この表現能力のあるプロセスが自分に合っていると言われた。密着しか出来ないプラチナプリントは大きなネガを作るためにN→P→Nで起こすことが多く、その間に焼き込みや覆い焼きが可能だそうです。乳剤を塗る紙も水彩画用の紙を色々試して雁皮紙というのに辿り着いたそうです。

デジカメの進出が著しい昨今にあって、こうした創作過程に手間と時間がかかればかかるほど、人の手による独創性が際だち魅力を感じると言われた。うなずけることいっぱいのトーク、そして作品に浸ったひとときでした。

ヘンリー・デービッド・ソロー　（森の生活）

1817 米国生まれ。ハーバード大学卒業

37 歳のとき輝かしい経歴をいっさい捨て去り、人里離れたウォールデン湖のほとりに自ら建てた小屋に引きこもり、自然の鳥、動物、魚たちとシンプルな生活を始める。２年後に街に帰り、「森の生活・ウォールデン」を書き記す。1862 年没。45 才

追記・中島

眼差しの触覚　平木収（写真評論）

人間の五感のうち、稼働率が一番高いのは視覚ではないだろうか。
直立歩行をし、四肢を巧みに操ってなんでもこなすヒトという生物は、
その行動を支える状況判断を行うための視覚が抜群に発達していて、
この役割は大きい。
ところが視覚は情報収集の役回りばかりが注目されて、
それ自体が楽しみの主役になることは少ない。
目の保養などという言葉があるが、
あれも目そのもののお楽しみというよりは、
目から入ってどこか他のところを刺激してくれるお楽しみである。
ところが、この写真展に居並ぶ作品と向き合ってみると、
手触りや肌触りなどといった感触表現と同様、
目で触覚のような何かを感じ、
それが心地よさを誘っていることに気付くだろう。
でもひとはその感覚を「目触り」とは呼ばない。
目障りという既得権を持つ言い方があり、
目触りなどという言葉を使うと、
まったくわけが分からなくなるからだろう。
それはさておき、インクや顔料の写真画像を頻繁に見るようになった昨今、
銀塩の写真印画に目をやることは、
もはや贅沢な楽しみの域にさしかかっている。
とはいえ、なんでもいいわけではない。
やはり審美眼に自信のあるまなざしが、
これぞと決めたものを見ることが肝心で、
それを楽しまなければいけない。
例えば、アンセル・アダムスのゾーン・システムによるモノクロームの印画などは、
その代表格だろう。
見つめる目が銀塩の滑らかな写真空間に引き込まれ、
そこで目の感触を楽しみ、同時に図形的な創造空間に遊ぶのである。
そこには、写真というものに関する常識を超えた、
もうひとつの視覚世界が広がっている。
私たちはこうした目そのもので受け止め、
直接その感触を楽しむ写真があることを忘れないでおきたい、
それは文化だから。
(2005 年ゾーンシステム研究会写真展にて)

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会第９回写真展［光への探求］全作品（1/3）

Water power station I
中島　秀雄

Water power station II
中島　秀雄

Water power station III
中島　秀雄

A fine autumn day
田中　英司

Outskirts of a Village
田中　英司

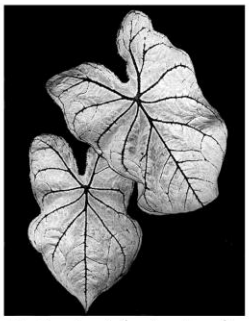
Kinsakubaru Forest
荒井　崇

Beech
古川　翔士

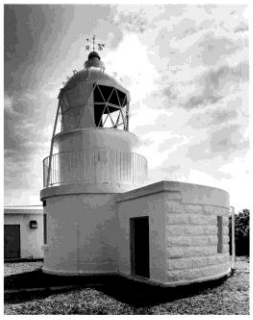
Bridge
木下　威

Objects
木下　威

Botanical (datura)
藤枝　義弘



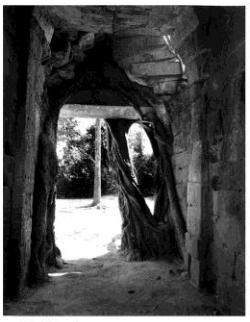
Botanical (caladium)
藤枝　義弘



Lighthouse
藤枝　義弘

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会第９回写真展［光への探求］全作品（2/3）

Mask
岡崎　克之



Ruin I
岡崎　克之

Ruin II
岡崎　克之

Snowfield
石井　政吉

Grass, Point Lobos
畑　文夫

Rock, Point Lobos
畑　文夫

Beech forest
松本　ひさ子

Red Pass, Utah
小野　望

Navajo land, Arizona
小野　望

Bottles
古谷津　純一

Forest, Yakushima
本田　勝美

Cape Hedo
石引　督規

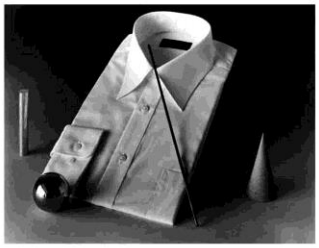
ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会第９回写真展［光への探求］全作品（3/3）

Mykonos
橘田　功

Akropoli
橘田　功

Forest
橘田　功

Late summer
菊池　淑郎



Memory
北野　龍一

Vegetables
北野　龍一

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会第9回写真展ｽﾅｯﾌﾟ

（2004.11）

ゾーンシステム・テクニカルアドバイス

＜レンズ磨きと再コーティング＞

中島 秀雄

私は、大型カメラ用に９本のレンズを持っている。ほとんど中古品で、新品のレンズは３本しかない。当然メーカーはバラバラで、シュナイダー、ニッコール、フジノン、コンゴー、ダゴール、コダックとなる。様々なレンズが使えるのも大型カメラの特徴で、それが魅力でもあると思っている。しかし、いわゆるレンズの味を写真表現したいと考えたことは一度もない。必要な焦点距離のレンズを予算に合わせて買っているだけで、絞れば周辺までシャープに写り、フィルムサイズに対してある程度アオリができるレンズであれば、暗いレンズでも多少傷があっても使ってきた。コマーシャルの世界ではカラー写真の発色に大きく影響することから、メーカーを統一するのが常識になっているが、私は様々なレンズで仕事をこなしている。カラー発色はレンズよりもフィルムやラボの違いが大きいと経験でわかっているからだ。

ここ２年ほど、８ｘ１０カメラの撮影に集中している。被写体に建築物や構築物が絡むことからワイドレンズの必要性を強く感じ、コダックのワイドエクター180mm F6,3 を愛用してきた。このレンズは古く、おそらく 30 年以上前のものだと思う。シャッター本体はキズだらけで、多くの人の手から手へと渡り、ようやく私の元にたどり着いたのだろう。シャッタースピードはすでに修理し精度はおおむね揃っているが、前玉と後ろ玉の表面に拭き傷があり、太陽の直射光が当たればコントラスト低下となって困っていた。そこで、以前訪ねたことのある山崎光学写真レンズ研究所へ修理に出すことにした。

山崎光学写真レンズ研究所は八王子にあるコンゴーレンズ知られた山崎光学から分かれた研究所で、現在は大久保に研究所と研磨工場がある。一般住宅を改装した 20 平米ほどの工場にはレンズ研磨用の連続機械、手磨き用の流し、ガスバーナー、棚には大小の研磨皿が並んでいる。一方の流しにはコールタールピッチの固まりが散乱し、手作業による研磨工程が想像できた。片側には真空蒸着用のステンレス製の釜が二台並んでいて、その形が魔法の箱のように見えた。若い職人がガスバーナーでピッチを温め細工している様子を見ていると、どうやらタールのピッチでレンズのカーブに合う型を取り、それを研磨皿に取り付けて機械にかけ磨くものと想像した。レンズのカーブに合う型作りに時間と熟練が必要になると山崎氏は言っていた。片隅に広げられた新聞紙の上には、ライカのズミクロンやエルマリートのレンズが並んでいて、この様子からどのようなレンズでも加工はできるのだと思った。全国から送られてきたレンズの空箱が山と積まれ、数少ない個人のレンズ磨き工房として貴重な場であるとの思いを強くした。

レンズの歴史は、はるか紀元前までさかのぼる。古代エジプトの遺跡からは水晶などの鉱石を磨き、装飾品として使っている。二世紀にはすでにレンズを拡大鏡として使っていたようで、14 世紀にはめがね用レンズが作られている。19 世紀に作られた暗箱カメラにはめがね用レンズが取り付けられ、明るい画像を獲得している。以来、様々なレンズが設計製造されてきた。レンズの由来は、ヨーロッパの人々が食べている“れんず豆”からきている。高度に設計されたレンズの代表に、ステッパーに使われているレンズがある。ス

修理したワイドエクタ

テッパーとは、小さなＩＣチップに回路図を焼き付ける機械のことで、超精密を要求される。そこに使われる高性能のレンズ枚数は 27 枚と信じられないような枚数になっていて、ステッパー１台の価格は 10 億円だという。日本が世界的に誇れるレンズがある。1993 年に完成したハワイ・マウナケア山にある望遠鏡スバルだ。レンズの直径 8.3 メートル、厚さ 24 センチメートルで、実は六角形のガラスを 66 枚組み合わせてバーナーで 1500 度に暖めながら一体にし、反射鏡として必要なカーブに仕上げたものである。このレンズが世界でもっとも大きな高性能一枚レンズになっている。

レンズ磨きが終了すると次に、コーティングに移る。コーティングとはレンズの表面に反射防止のための薄膜を蒸着することだ、反射があると光の透過率が落ち画像が暗くなったり、レンズの反射光によって有害な像が生じたりする。コーティング作業は磨いたレンズを真空蒸着槽の中に入れて、コーティング材料を蒸発させて行う。真空にすることで蒸着材の粒子が均一にレンズに蒸着する。材料としてはフッ化マグネシュウムが使われ、さらに反射率を低下させるために多層膜コーティングすることもある。

アインシュタインは、光は波でもあり同時に粒子であると述べている。光はレンズを波として通過し、フィルムには粒子として作用する。光が波として作用する場合、回析と干渉というふたつの現象が起こり、小さな穴を通過するとわずかに光は曲がり、画像が滲む現象が回析である。二つの波がぶつかって強めあったり弱めあったりする現象が干渉である。水面に油があると虹のように見える現象は、水面に反射した光と油面に反射した光が干渉して虹のように我々の眼に届く。この干渉を利用したのがレンズのコーティングだ。レンズの表面に薄膜を塗布することで、コーティング層で反射した光とガラスの表面で反射した光とが互いに干渉し合い、結果として反射率を低減することができる。

レンズ磨き皿

真空蒸着釜

仕上がった私のレンズ表面は、新品と見間違うほど輝き、早く使ってみたくなる。レンズに着いたホコリ、ゴミは撮影現場で十分に取れず、それを無理して汚れた布で拭いたりすることから拭きキズをつけてしまう。ロバート・キャパは戦場でレンズを拭くときネクタイを使うと本に書いてあった。長年使っていれば拭きキズが増え、また、内側のレンズに曇りが出てコントラスト低下やフレアーが出てしまうこともある。そういう場合はレンズ磨きと再コーティングいう方法がある。

修理期間はおよそ２週間、料金は２万円でした。

研究会展での出会い

中島 秀雄

第９回研究会展は、過去の研究会展の中で最も短い期間で行われた。しかし、多くの人々との交流の場として、充実した展覧会になったと感じている。

私は、長年温めていた発電所の写真の一部を展示した。このテーマは、以前発表した“リバー”を撮り続けていた頃がスタートになっている。川の上流にはしばしば発電所、導水管、水門、堰といった構築物が目に入り、それをさけながら水の流れや周辺のディテールにカメラを向けていた。普段の仕事で建築撮影が多く、建築物や構造物には大いに興味はあり、リバーの撮影中発電所の建物や周囲の構造物は大変気になった。そして、いつの日か、スペクタクルな発電所をテーマにまとめてみたいと考えるようになっていた。しかし、いざ始めてみると強く引き付けられる発電所もあれば、あまり感じないものもあってその違いは何なのか、なぜなのかはっきり捉えることができず現在に至ってしまった。建築物は人間が作ったものであり、そこには設計者、施工者の感性、美意識が見え隠れする。美しく見える部分もあれば、経済優先の醜の部分もあり人間性が見えてくる。純粋な自然を撮るのとはここに大きな違いがある。

北野進氏

環境を構成するもの、自然を巧みに利用する人間の知恵とロマン、自然エネルギー、スペクタクルな空間、建築物、時間性等いくつかのキーワードをかかえ取り組んでいて、これらのキーワードを成立させる方法として、8x10 カメラの使用がベストだと感じている。

北野進氏著書

会期２日目、ギャラリーの相川さんに新聞を見せられた。日本経済新聞の文化覧に“回る水車発電所100歳”というタイトルで、ドイツ・フォイト社製水車の写真と技術史研究家の北野進さんの顔写真が載っていた。私はあまりの偶然に驚き、日経に電話、メール、ファックスを送り、返事をまった。翌日ギャラリーに直接電話が入り、事情を説明し北野さんにぜひ会いたいことを伝えると、住所、電話番号を教えてくれた。

北野さんは現在の千葉大学機械科を卒業し、長野県の高校の校長先生までやり遂げた方。現在は退職し、長野県が発展した機械工業の歴史と人間に焦点をあて、執筆活動を続けている。著書も多く、埋もれてしまいがちな地方の工業発展に寄与した人物やその流れを丹念に調べ上げ、現在でも貴重な資料になっている。発電所の歴史にも詳しく、電気が日本の文化産業に与えた大きさは計り知れない。ところで、日本における電気の周波数は50サイクル地帯と60サイクル地帯に分かれていることはよく知られている。しかし、なぜ二つの周波数に分かれてしまったのかは知る人は少ない。著書によると、長野県は明治から製糸業が発達していてそのエネルギーは水車を利用するものだった。因みに、当時、製糸業にたずさわるベテランの女性工員には年間100円の収入を得る人もいたという。100 円は家が一軒建つ金額だっ

たようで、製糸業は過酷ではあるが当時の花形産業だった。これらの動力に電気を起こしモーターに変換することで効率は飛躍的に伸びることからドイツへ研究に行き、ドイツの 50 サイクル発電機を購入し、電気を起こしたことが 50 サイクルになっている。その後、多くの資本家が電気事業に投資するようになり、多くの発電設備が長野県に作られた。そして、アメリカの発電設備にも関心が集まり、アメリカへ発電設備の研修に出向いた折に 60 サイクルの発電機に目がとまり、50 サイクルより効率は 12%よいことからアメリカの発電機が輸入され、50 サイクルと 60 サイクルに分かれたというものである。長野県には 166 箇所の発電所があり、50 サイクルの発電所と 60 サイクルの発電所が点在している。そのうちの一つドイツ・フォイト社製の発電機 1903 年製造が現在も稼動し、100 年になるという。メインテナンスを正しく行えば、機械は 100 年間稼動することに驚いた。原子力発電設備は放射能によって 30 年程度で傷んでしまい、解体には未だ確立した方法が見つからないし、莫大な費用がかかることを考えると水の国日本の水力発電は理にかなった方法であると改めて感じた。

国の文化財保存は神社仏閣などが中心で、産業遺産への関心はまだ余りなく、産業の近代化を支え、見守り続けてきた生き証人である発電所にもっと光があたってほしいと結んでいる。

余談ではあるが、医学の世界では幕末から明治にかけて千葉の佐倉順天堂が関東方面では最初になる。佐藤泰然が蘭医シーマンについて外科を学び千葉に医術を起こした。佐藤泰然には 5 人の息子がいたが息子に順天堂を継がせることはなく、弟子の佐藤進がドイツに医術を学び、彼に継がせることになり現在の順天堂病院の前身になっている。北野進さんの**進**の由来は佐藤進のようになりなさいということで名がついたといっていた。順天堂病院には会員の古谷津　純一さんが勤めています。

著書には、明治時代長野県の産業の苦闘の様子が手に取るようにわかり、時代の節目に新たな産業に転換する人々のスリリングな機転が熱く伝わってくる。味の素の前身鈴木商店も電気産業に関わっていた。自民党の政治家小阪善太郎の祖父も電気事業に関わっていることも分かり、この偶然の出会いがなければ決して読むことはなかった本との出合いにもなった。写真集としてまとめるなら、他の産業の遺跡を三つくらい抱き合わせてページや興味を増やすことで進めるのがいいだろうというアドバイスをいただいた。そのときには一筆書いてもいいという内諾もいただいた。

写真と直接関係ない内容になってしまったが、ギャラリーでの一つの出会いとしてまとめてみました。

ｿﾞｰﾝｼｽﾃﾑ研究会定例会日誌

2004年12月11日(日)　　記録：荒井崇

・出席者：中島先生、北野、木下、松本、畑、荒井、岡崎、小野、小谷津、石井、橘田、圓子、菅野、菊池、田中（英）、鈴木、越後、長谷川、鷲尾（見学）

・作品持参者：圓子、橘田、小谷津

・新入会者２名紹介有り。(越後久雄氏、長谷川登氏)

・見学者１名紹介有り。(鷲尾氏)

・２００４年展覧会についての感想。

＊確実に上達しているが、反面やや個性が無くなって来ている感じがする。(来場者)

＊参加人数１６人は少なかった。(中島先生)

＊人物写真が無かった。(中島先生、来場者)

＊DM のデザインが良くなかった。(中島先生)

＊窓側の作品が相変わらず見にくい。(会員)

＊展示の際、もう少し傾向別に並べた方が良い。(会員)

＊開催時間を早めたい。(12:00→11:00)(会員)

＊照明をスポットライトにしたい。(中島先生)

＊照明色温度のばらつきを少なくしたい。(会員)

＊撮影データシートを展示したい。(会員)

＊欲しい DM の枚数の希望を採って欲しい。足りない人も居た。(会員)

＊レセプションパーティーの場所が２つに分かれているのは不便。できれば会場のみで可能な広さが欲しい。(会員)

・Texas Photography Society の会員になると、USA の写真家の情報が得られるので役に立つ。オークションやプリント販売も有り。(中島先生より)(会費は年間$50)

(ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ:www.texasphoto.org)

・今年は人物撮影会、暗室ワークが出来なかったので残念であった。暗室ワークは春に計画してはどうか。(中島先生より)

・来年は１０周年なので東京と地方２ヶ所で展覧会を行うことを検討する。

東京での会場は安価で広いギャラリーを検討する。新宿シリウス、四谷ポートレートギャラリー等を検討。期間は費用削減のため短くても良い。（６日間くらい)

地方は京都のイシスを第一候補とする。(できれば企画で行ってもらうよう交渉)

・来年の写真展は、今までの作品の中からベストのものを選び、出来れば半切で展示することを検討。また、新作も一部展示する。(中島先生より、新作はテーマを絞ってやってみたらどうかとの案有り。)

・１０周年記念でポートフォリオ制作を検討する。例えば１人１点、会員人数分＋αの枚数をプリントし、会員全員に配ると同時に、美術館や工芸大、日大、写真美術館等へ寄贈することも考える。装丁は、例えばプリントのみあるいはブックマットを、市販品のケースへ入れる。日程は必ずしも来年中に完成しなくても良しとし、余裕を見て仕上げる。

・来年の講演会講師として春日氏を検討中。春日氏は、USA 仕込みのモノクロームデジタルプリントを駆使する風景写真家で、１１月にニコンサロンで写真展を開催している。元々はゾーンシステムを実践していたらしい。「デジタル表現ではあるが、私たちにも参考になる要素が多々有る。」とのことである。

・土居氏（USA にてパイロ現像を習得した日本人

写真家）が開発したフィールドカメラ用フードが銀一で発売になったので、現物を紹介した。商品名：MODJULARHOOD（荒井が説明）
樹脂製折りたたみ式の、伸縮可能な高遮光性タイプ。ゼラチンフィルターも装着可。
欲しいと言った方が数人。中には、「引き伸ばしレンズフィルター装着用として欲しい。」という人もいた。反面、「広角や８ｘ１０用大型レンズでの使用がむずかしいのではないか。」「アダプターモジュールが 3000 円と高価なので、手持ちレンズ全てに装着するのにコストがかかる。」との意見もあり。

2005年1月15日（土）　　記録：畑文夫

・出席者：中島先生、小野、古川、田中（英）、田中（肇）、松本、山本、石川、北野、古谷津、石井、圓子、鈴木、宮内、浜野、長谷川、越後、畑
・作品持参者：田中英、松本、石川、石井、古谷津、畑

■　新入会員：宮内、浜野、越後　各氏
■　今年度第１０回写真展の計画（１０月以降？）
・東京会場：シリウス（新宿御苑）、またはポートレートギャラリー（四谷）
・京都会場：ギャラリー　イシス、ほか
・プリントサイズを１４×１７にグレードアップしたい。（フレームは変更せず）
・過去の展示作品、及び新作を出品。
・会場確保のためのプレゼンテーション用プリントを収集する。
1.中島先生が過去の写真展作品からセレクトする。事務局経由で各人に該当作品を連絡。（～１月末）
2.各人プリントを中島先生宛に郵送。（２月末締め切り）
プリントはバライタ（RC 不可）８×１０サイズに統一。余白１０ｍｍ（片側・最低）に統一。
・中島先生セレクト以外にも、自信作、新作を送ってもらう。
■　総会について
２００５年2月２０日（日）
ランドマーク１３階、フォーラムよこはまセミナールーム１
・総会：１時～
・セミナー：３～５時　倉持悟郎氏（GIP）講演　タイトル未定
（準備のため、別途役員会を行う）
■　冬の撮影会（参加者募集）
・日程：３月５～６日
・場所：裏磐梯（福島県）または　丸沼・菅沼周辺（群馬県片品村）
・被写体：雪景色
■　暗室ワーク計画
３月下旬　工芸大学暗室を借用予定。原則として１４×１７伸ばし
■　アダムス暗室見学ツアー（参加者募集）
・仮日程：６月１日～７日
・費用：２０万円前後？　（航空運賃と宿泊費／食費、レンタカーなどは別途）
カリフォルニア州　カーメルのアダムス旧居暗室見学、市内撮影、ポイント・ロボス撮影など、またとない機会ですので奮ってご参加ください。
■　その他
HP 作品のコメント未記入の方は１月中に事務局へ送付願います。

Information

【トピックス】

写真展「ブレット・ウエストンとその仲間」見学会

２００４年１２月２６日、「ブレット・ウエストンとその仲間」東京写真文化館見学会が行われました。写真文化館は、これを最後に閉じることになる。私たち研究会が大変お世話になったギャラリーなので、とても残念です。

Information

【売ります】

中島秀雄

・４ｘ５引き伸ばし機

フジ４５S（整備済）

・米国より印画紙のまとめ買いをします。

詳細はホームページ伝言板を参照してください。

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）

・パソコンの電子メール

・ウィンドウズの Word2000

・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集部］荒井　崇